

看護における effectiveness research RCT を超えて

看護に携わっている人ならば、「看護学のエビデンスはどのように築いていけばよいのだろうか、医学あるいは自然科学と同様な方法でしかエビデンスを築けないのだろうか」と疑問に思われたことがあるであろう。

Randomized Control Trials(RCT；ランダム化比較試験)は、エビデンスのレベルとして最も信頼性の高い研究方法として位置づけられてきた。また RCT は私たちがよく目にするエビデンスレベルの表では最上位に書かれているため、RCT は研究方法として最も優れたものであるという「RCT 万能論」のような誤解を生じさせているようでもある。看護研究においても RCT によって確固たるエビデンスを築こうと多くの研究がなされ、海外学術雑誌には RCT の研究を集約したメタアナリシスも盛んに発表されるようになった。一方で、RCT への疑問や批判も高まりつつある。RCT は対象者の選択条件を設けランダム割り付けを行なうことによって均質な複数の集団をつくり、介入効果を評価しようとする研究デザインであり、内的妥当性(因果推論の適切さ)は非常に高い。しかし、均質性を求めれば求めるほど、実存する人々とは乖離し外的妥当性(一般化可能性)を失うという問題が生じる。個々の患者をみる臨床家らは RCT の結果が万能でないことを肌で感じていることだろう。

1つの研究ですべてを解明することはできない。それぞれの研究方法には利点とそして弱点がある。ましてや看護が直面する「現実世界」の現象は、多因子が複雑にからみあっている。その非常に複雑な現象を解き明かし、そして未来を改善すべく効果的な看護介入を実践していくためには、さまざまな研究法の利点を駆使し、積み重ねることによって弱点を補っていく必要がある。そのために看護学は社会学、哲学、人類学、医学など多くの周辺分野から貪欲に研究法を取り込み消化してきた。

本焦点では、兵庫県立大学に Ivo Abraham 先生を迎え、現実世界での効果(effectiveness)を研究していく必要性和その考え方について、そして effectiveness research を看護がリードしていかなければならない理由についてご講義いただいた内容を紹介する。先生は、RCT のような実験的環境下においての効果を efficacy(効能)、現実世界でみられる効果を effectiveness(実効)と呼んで区別されている。

本焦点を通し、看護研究の明日を切り開く研究法に思いを馳せながら、本焦点をお楽しみいただきたい。

(企画：坂下玲子 兵庫県立大学看護学部教授)